OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代活版印刷資料における外来語に付される傍線と振り仮名の関係について ： 『西国立志編』を中心に
Author(s)	藤本, 能史
Citation	語文. 2026, 124-125, p. 56-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103851
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代活版印刷資料における外来語に付される傍線と振り仮名の関係について

――『西国立志編』を中心に――

藤本能史

一　はじめに

外来語等の特殊な単語に、傍線・鉤括弧といった補助符号が付されるのは、一八世紀中期頃からである。近世においては、医学書・蘭学資料など一部の資料に限られていたが、明治時代に入ると、外[1]来語に傍線・鉤括弧を付す表記形式が主流となる。このような表記形式は徐々に衰退していくが、その要因として、深澤（二〇〇六）は、漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文への移行を挙げる。片仮名交じり文において、片仮名表記外来語を「てにをは」等と区別するために符号が使用された。しかし、平仮名交じり文に移行し、文字列単独で区別が可能になったことで、符号を付す必要性が希薄化し、符号が使用されなくなったと指摘している。また、藤本（二〇二三）は、外来語の表記形式（漢字表記・仮名表記）の違いに注目して補助符号の使用状況を調査した。傍線・鉤括弧を付す表記形式は明治後期頃から徐々に衰退していくことを示し、その要因として以下の点を指摘した。

・仮名表記外来語の場合、漢字片仮名交じり文では仮[2]名替え無しの資料が多く、漢字平仮名交じり文では仮名替え有りの資料が多い。すなわち、外来語片仮名表記への固定化が進み、平仮名交じり文への表記体の移行と重なることで、符号が衰退した。

・漢字表記外来語は、仮名表記より符号の衰退時期が早い。仮名表記と比較して、漢字表記は文字列単独で語のまとまりが区別しやすく、符号を付す必要性が薄い点が要因であると考えられる。

・外来語の主要な表記形式が漢字表記から仮名表記へ移行し、その上で漢字表記される語が一般に認知される語に限られるようになったために、漢字表記に符号を付す必要性が失われた。

しかし、近代の国語文字・表記を研究するにおいては、表記形式にのみ注目するのではなく、印刷形式にも目を向ける必要があると考えられる。

近世期に整版印刷が主流になったことで、書記効率より読者に

とっての読みやすさが重視されるようになった[3]。幕末・明治期には活版印刷術が導入され、活版印刷が主流となった。矢田（一九九八）は、濁点・句読点・鉤括弧といった表記符号が、印刷時代への変化に伴い性格が変化していると述べている。

即ち、濁音点や句読点のような、元来手書き文化の中では寧ろ読解行為の側に属していた要素が、印刷の時代に入って、「消費者指向」の流れの中で書き手側の作業に任せられるようになる。或いは引用符としての鉤括弧のように、整版印刷時代になってから発明される記号も出てくる。手書きの段階では経済性の観点からして書記行為に組み込まれなかったものが、整版印刷術によって書記行為の一部となっていくということである。更に活版印刷はそのことを決定付け、種々の意味で表記符号が文字体系と同価値化されていく。濁音点は仮名文字を構成する筆画の一部となることで、文字そのものと融合して濁点となり、龍麿が懸念した、濁音を示す点を「おとしなどもす」ることは、普通にはなくなるのである。句読点や鉤括弧は、文字と同列に並べられ、書記行為の線条性の点に於いて、置かれるべき場所＝物理的先後、の通りの順番＝時間的先後で書かれるという点で、文字そのものと同じ価値を獲得している。即ち、それまでは文字に対する補助記号として、文字の外にあった表記符号が、文字体系を構成する一部にまでその地位を高めたということである。

矢田（一九九八）、五八三～五八四頁

一方、文字の左右に配置されるという点で傍線と共通している振り仮名については、矢田（二〇一二）で以下のように述べられている（傍線は筆者による）。

書写から整版印刷へ、更に整版印刷から活版印刷という文字生産技術の展開に伴って、振り仮名は句読点や濁点と同様に、読解行為側のものへと変質していった。しかし、特に活版印刷によって句読点や濁点が本行や仮名本体の一部へと変貌していくのに対して、振り仮名は「傍書」であり続けた。活版印刷は、句読点や濁点のようには、振り仮名を根本的に変質させる―言い換えれば、表記本体へ昇格させる―ことはなかったのであり、同じ訓点由来の要素の中で一人取り残されていくことになった。

矢田（二〇一二）、五八四頁

活版印刷が主流となっても、振り仮名は、語の読み方・意味を示すために「補助的に」付されるものであった。外来語に付される傍線も、外来語の纏まり・種類（地名・人名・官名など）を標示する補助的な符号として「傍書」されるものであり、印刷上の行間の制約などから、傍線の使用に振り仮名が影響する可能性があるのではないだろうか。そこで本稿では、近代活版印刷資料における外来語に付される傍線について、振り仮名との関係に焦点を当てて考察を行う。

本稿ではまず、『西国立志編』洋装活版本諸本の検討を通して、傍線と振り仮名との関係について一定の傾向を示す。さらに、他の資料の用例を検討することで、示した傾向について考察を行う。

二　調査資料

一定の傾向を示すための調査資料として、明治初期の啓蒙書である『西国立志編』諸本を取り上げる。『西国立志編』は、啓蒙思想家・中村正直によるサミュエル・スマイルズ『Self-Help』の翻訳書である。自助の重要性を説いた本書は、青少年たちに多大な影響を与え、明治期のベストセラーとなった。

『西国立志編』を調査資料とした理由は二点ある。一点目は、振り仮名の配置である。『西国立志編』における漢字語彙は、読み方を示す場合は主に右側、意味を示す場合は主に左側に振り仮名が付されている[4]。外国地名・人名は、読みを示すため主に右側に付される。外国地名・人名には、右側に傍線を付すことが明治期の一般的な表記形式であるが、振り仮名の配置による影響を受けている可能性がある。

二点目は、版面の異なる諸本が存在する点である。『西国立志編』はまず一八七一年に、静岡で整版本の形式で出版された。一八七六年には、整版本の体裁を踏襲した洋装活版本が、奎章閣から出版された。田中（二〇二三）によると、洋装活版本には奎章閣版の他、様々な版が存在することが指摘されており、版によって本文の行数などが異なっている。諸本を比較することで、版面の違い（行間の制約など）による影響の検討が可能となる。

以上の理由から、『西国立志編』諸本を調査対象とする。諸本一覧を、次頁の表1に纏めた。所蔵が明記されているものは、筆者が実際に確認した資料であり、確認できなかったものは「未見」としている。出版者・出版年月の他、判型・本文の行数・傍線の有無・振り仮名の位置を示している。系統名は筆者による。

次節より、各系統における傍線・振り仮名の使用状況を検討する。各系統の出版経緯については、各項で述べる。

三　各系統における符号の使用状況

三・一　整版本

まず、整版本を見ていく[5]。整版本は最初に、一八七一年に駿河国静岡藩で和装一一冊のかたちで出版された（静岡版）。版木はのちに同人社（一八七三年設立）へと移り、同じく和装一一冊のかたちで同人社版が出版された。また、和装八冊の形式に改め、六書房版が出版された（版木は同人社版と同じ）が、刊年は不明である。いずれも本文一二行であり、左右にルビ・傍線・圏点等が付されており、傍線は外来語に付されているが、漢字表記・仮名表記とで付される位置が異なっている（用例（1）～（3）は、静岡版による）。

（1）シーザルスハ．人民ノ己ヲ（オノレ）認（トメ）テ君主トナシテ順従スルモノハ．コレヲシテ福利ヲ得セシムル┐ヲ務ム（中略）維多爾（ヴイクトル）・休哥（ヒウゴ）筆ト劔ヲ論ジテ．彼レ此レヲ殺スニ非レハ此レ必ズ彼レヲ殺ス」トイヘルハ．　第一編、五丁裏～六丁表

（2）ベニンシユラノ戦ニ．加比丹（カピタイン）ノ次官ナル人．ソノ隊伍ノ傍（カタハラ）ニ在リ．深泥ノ中ニ艱難（ヤツトアルク）行歩スルヲ見テ．或人コレヲ稱

表1　『西国立志編』諸本一覧

系統	出版者（所）	出版年月	判型	行数	傍線	ルビ位置	所蔵	請求記号
整版本	駿河国静岡藩	1871年7月	半紙本	12行	有	左右	国立国会図書館デジタルコレクション	9-33ロ
	同人社	1873年2月以降					国書データベース（江戸東京博物館一般〈89204963～89204973〉）	DIG-EDOM-10492
	六書房	不明					国立国会図書館デジタルコレクション	9-33
奎章閣	奎章閣	1876年11月	四六判	12行	有	左右	熊本県立図書館	/フヤ/1205/
	根本篤造	1881年10月					天理大学附属天理図書館	154//3（8）
	秋元房治郎	1886年11月					天理大学附属天理図書館	154//3（2）
木平譲	木平譲	1877年2月	四六判	11行	有	左右	九州大学附属図書館檜垣文庫	檜垣文庫/73/S 1
	七書屋	1877年2月					国立国会図書館デジタルコレクション	31-217
自由閣	自由閣	1887年2月	四六判	13行	無	左右	国立国会図書館デジタルコレクション	33-203
	瀧川書店	1887年2月	不明	不明	不明	不明	未見	—
	川勝鴻宝堂	1888年7月	四六判	13行	無	左右	国立国会図書館デジタルコレクション	特21-487
	井上一書堂	1906年1月		13行		左右	天理大学附属天理図書館	154//3
自由閣4版	自由閣4版	1887年11月	四六判	16行	無	右のみ	国立国会図書館デジタルコレクション	特21-54
	文事堂	1888年4月					国立国会図書館デジタルコレクション	特21-485
	文榮閣	1899年2月	不明	不明	不明	不明	未見	—
	求光堂書店	1899年10月	四六判	16行	無	右のみ	筆者蔵	—
岡本仙助	岡本仙助	1887年10月	四六判	15～17行	無	左右	国立国会図書館デジタルコレクション	特21-486
	偉業館	1888年11月					国立国会図書館デジタルコレクション	特21-53
	修学堂書店	1903年2月					国書データベース（弘前市立弘前図近代〈159-bS〉）	300011231（書誌ID）
その他	銀花堂	1888年1月	四六判	18～20行	無	右のみ	国立国会図書館デジタルコレクション	特21-481
	博文館	1894年7月		13行	有	左右	国立国会図書館デジタルコレクション	31-217ロ

賛シ・彼（カレ）ニ一年ノ産一萬五千金ノ人歩行セリ」ト云ヒケリ・今時ニ在リテ・色抜斯土卜兒（セハストボルボンド）ノ寒地・及ヒ印度（インド）ノ熱土ニ於テ・

第一編、二五丁表

（1）は、人名に単線を付す例であるが、漢字表記「維多爾（ヴイクトル）・休哥（ヒウゴ）」は左側に単線が付されているのに対し、仮名表記「シーザルス」は右側に付されている。（2）は、地名に複線を付す例であるが、漢字表記「色抜斯土卜兒（セハストボル）」「印度（インド）」は左側に複線が付されているのに対し、仮名表記「ペニンシユラ」は右側に付されている。ただし、截然とした使い分けがなされているというわけではなく、仮名表記の方が右側に付す割合が高いということである。[6] 小林（一九八二a）において、『西国立志編』の外国地名における符号の使用状況の調査が行われているが、外国地名が漢字表記の場合は九七・五%が左複線であるが、仮名表記は七三・三%であった（表2）[7]。このような結果となった要因について、小林氏は以下のように述べている。

表2　外国地名における複線の位置

	漢字表記	仮名表記
左複線	234	63
	97.5%	73.3%
右複線	0	23
	0.0%	26.7%
線なし	6	0
	2.5%	0.0%
合計	240	86

これは、『西国立志編』におけるふりがなの使いわけに合せたためではなかろうか。『西国立志編』のふりがなは、右側にあれば読みを、左側にあれば意味をあらわしていた。だから、外国地名の漢字表記において、地名の読みを示す

ふりがなを右側につけ、地名であることを示す二本傍線を左側に付したのではなかろうか。外国地名の片仮名表記において、二本傍線のつけ方に統一性がないのは、右側につけるふりがながないために、地名を示す二本傍線は右側に付すという明治期の一般の表記が入りこんで生じた現象と考えられる。

小林（一九八二a）、一四七頁

明治期一般の表記形式は、地名の右側に傍線を付す形式であるが、『西国立志編』の場合は振り仮名が右側に付されるため、傍線を左側に付したということである。この現象は、は人名についても同様であった。つまり、符号の配置に際しては、振り仮名の位置を優先していると考えられる。役職名のように、意味を示す振り仮名が左側に付されている場合、傍線は右側に付される。

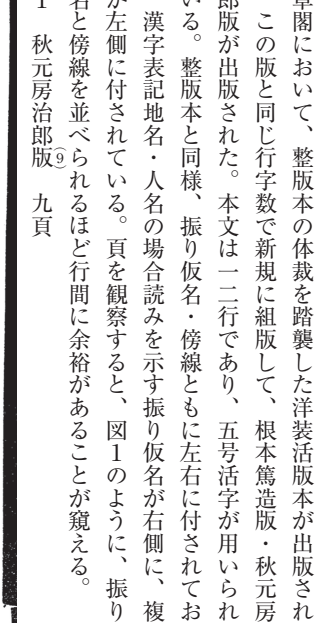
（3）勉學ヲ譽メテ「童子努力學習セヨ、他曰汝聖會保長ノ（テフノヤクニン）如キ衣服ヲ着タルニ至ルベシ」（ツトメテ）ト云ヘリ　第一編、一七丁裏

ただし整版印刷の場合、版木に彫り込む形式であることから、傍線・振り仮名の配置に関する版面上の制約は少なく、傍線・振り仮名を同じ位置に配置することも容易である。しかし、活版印刷の場合、活字のスペースに制限があるため、行数等によっては同じ位置に配置することが困難となる。その場合、傍線の使用において振り仮名がどのように影響するのか。洋装活版本諸系統の比較を通じて確認する。(8)

三・二　奎章閣系統

中村正直らは、版権免許を取得し、『西国立志編』を洋装活版本で再版しようと考えていたが、版権取得直前の一八七六年九月、奎章閣において、整版本の体裁を踏襲した洋装活版本が出版された。この版と同じ行字数で新規に組版して、根本篤造版・秋元房治郎版が出版された。本文は一二行であり、五号活字が用いられている。整版本と同様、振り仮名・傍線ともに左右に付されており、漢字表記地名・人名の場合読みを示す振り仮名が右側に、複線が左側に付されている。頁を観察すると、図1のように、振り仮名と傍線を並べられるほど行間に余裕があることが窺える。

図1　秋元房治郎版(9)　九頁


ノハ、コレチテ福利ヲ得セシムルヲ務ム、コノ教派ハ人民ノ爲ニ百事
チ具ヘントス欲スハ民ヨ由テ一事ヲ成ヲ欲セス、コノ教派ヲ卽トセハ、
必ス衆民天民是非ノ心ヲ强テ覇政ニ服リ入ラントスルノ患ヒアリ、シ
ーサリスムハ極劣ノ神像ナリ、ソノコレチ拜膜スルモノハ特ニソノ勢
力ヲ怕ルヽノミ、ソノ益キニ至リテハ特ニソノ財貨ヲ利スルノミ、百助
クルノ說ハコレヨ比スレハ遙ニ平穩ニシテ暴害ノ生セサル數ナリ、世人
コノ說ヲ能ク理會シタランコトヲ、ーヴリスムハ虐樂シテ再ヒ興サル
ヘシ、コノ兩說ハ互ニ相容サルノ仇敵ナリ、羅多爾○体哥筆ト劍ヲ論ジテ、
彼レ此レヲ殺スニ非レハ此レ必ス彼レヲ殺ストイヘルハ轉用シテコ
ノ二說ノ反對スルモノヲ論用ベキナリ、

〔六〕自立ノ事ヲ論ス

國政ヲ論スルモノ或ハ人民ヲ主トシ、或ハ君民協議ノ法ヲ主トス、然レドモ

William Dargan.

田中（二〇〇二）は、奎章閣版は傍線付き活字を使用しているのではなく、行間に傍線を組み込んで版面を作製していることを指摘している。

五文字の言葉につける傍線なら五文字分の長さの罫を使うのが普通だが、これが初期の頃は文字一文字分の長さに切った罫を大量に用意しておき、それを細切れに入れていったらしい。

もっともこの本文は、文字と文字との間がそれぞれ三分（一文字の三分の一の寸法）または四分（一文字の四分の一の寸法）ずつ空けて組版されているので、全角（一字分）寸法の細切れの罫を空きなしで入れていくと字間の寸法の分が足りなくなっていき、罫を余分に継ぎ足さなくてはならなくなる。

活字に詳しい板倉雅宣さんのお話では、ボディに罫が鋳込まれた活字もあったということであるが、奎章閣版の傍線を見ると、隣の行のルビや傍点と近接するケースもあり、どうも罫つきの活字ではないように思われる。

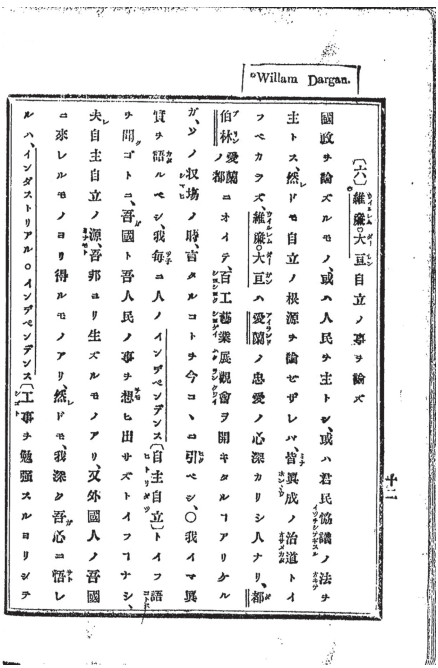
田中（二〇〇二）、五八頁

行間に罫や振り仮名等の符号活字を二行分組み込むだけの余裕があること及び、一字サイズの罫を細切れに使用して組版することで、整版本の複雑な版面を活版本でも再現できたのだと考えられる。

三・三　木平譲系統

一八七七年、中村らが版権を取得して出版したのが木平譲蔵版本である。奎章閣に先を越されたため、書名に「改正」が冠されている。同じ組体裁で、七書屋蔵版本が刊行されている。いずれも本文一一行で、五号活字が使用されている。奎章閣本と同様に、振り仮名・傍線ともに左右に付されており、漢字表記地名・人名の場合読みを示す振り仮名が右側に、複線が左側に付されている。奎章閣版と同様、行間には余裕があることが窺える（図2）。

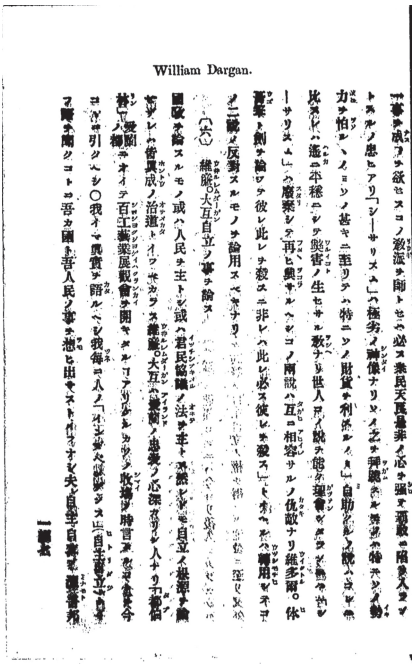
図2　七書屋版[10]　一二頁



三・四　自由閣系統

一八八七年に出版された自由閣版は、三刻までは同じ紙型の鉛版で印刷している。三刻の紙型は瀧川書店に移った後、さらに大阪の井上一書堂に移り一九〇六年に出版された。また、京都の川勝鴻宝堂版は、系統関係が判然としていないが、田中（二〇二三）は、自由閣三刻版・瀧川書店版いずれかと同版ではないかとの見解を示しているため、ひとまず自由閣系統に含めておく。本文一三行で、五号活字である。振り仮名は左右に付されているが、左振り仮名は大きく減少している。外国地名・人名には傍線が付されておらず、仮名表記外来語に鉤括弧を付す形式を採っている（図3）。

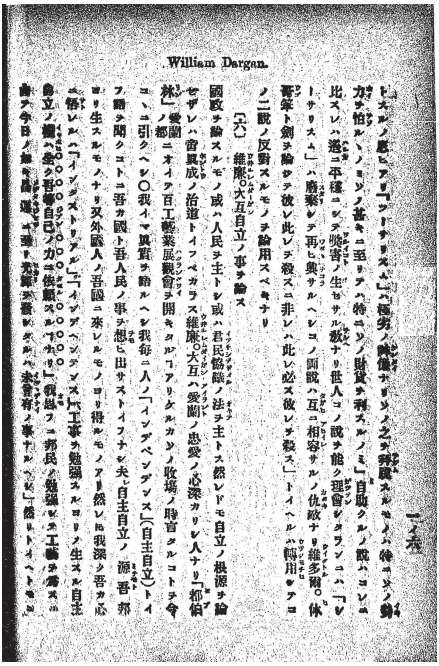
図3　自由閣版[11]　七頁


William Dargan.

三・五　自由閣四刻系統

自由閣は、三刻の紙型を瀧川書店へ手放した後、新たに組版して四刻を出版した。五号活字であるが、本文の行数を三刻の一三行から一六行に変更している。四刻の紙型は、文事堂・文栄堂・求光閣書店へ移り、それぞれ出版されている。傍線は使用されておらず、鉤括弧が付されている。振り仮名は右側に付されている（図4）。

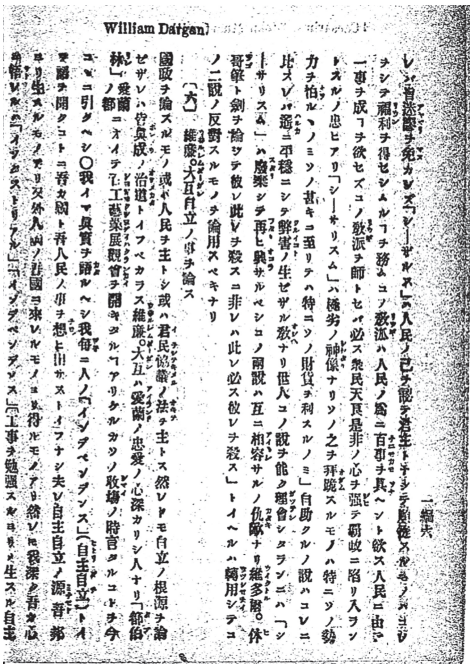
図4　自由閣四刻版[12]　六頁


William Dargan.

三・六　岡本仙助系統

自由閣とは別の組版で、一八八七年に出版されたのが岡本仙助版である。翌年には、岡本仙助が翻刻発行者で偉業館の名を記したものが出版された。岡本仙助版の紙型鉛版は修学堂書店に移り、五号活字であるが、行数は頁によって異なり、一五～一七行である。傍線は使用されておらず、仮名表記外来語には鉤括弧が付されている。振り仮名は右にのみ付されている（図5）。

図5　岡本仙助版[13]　六頁



三・七　その他

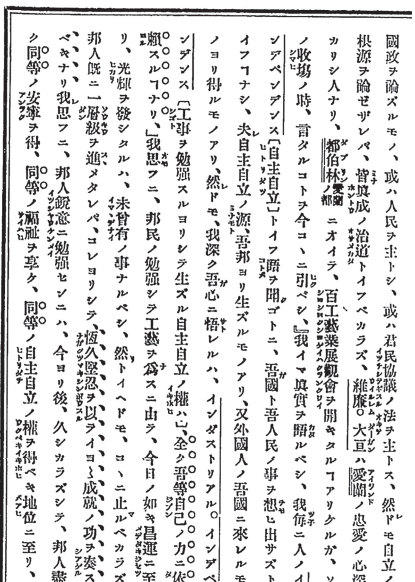
銀花堂版は、五号活字であるが、行数は一八～二〇行であり、行間が非常に狭くなっている。傍線は使用されておらず、仮名表記外来語に鉤括弧が付されている。振り仮名は右のみに付されている（図6）。

図6　銀花堂版[14]　四〇頁



博文館版は、木平譲系統の版権を博文館が正式に譲り受けて出版したものである。五号活字であるが、体裁は木平譲版と異なり、本文は一三行である。版権を譲り受けていることもあり、木平譲系統と同様、振り仮名・傍線ともに左右に付されており、漢字表記地名・人名の場合読みを示す振り仮名が右側に、傍線が左側に付されている。行間には余裕があることが窺える（図7）。

図7　博文館版[15]　九頁


*William Dargan.

國政ヲ論ズルモノ、或ハ人民ヲ主トシ、或ハ君民協議ノ法ヲ主トス、然ドモ自立ノ根源ヲ論セザレバ、皆眞成ノ治道トイフベカラズ、維廉ハ大旨ハ愛顧ノ恩愛ノ心深カリシ人ナリ、都治林ノ都ニオイテ、百工藝業展覧會ヲ開キタルコアリシガ、ソノ收場ノ時、言タルコトヲ今コヽニ引ベシ、『我イマ眞實ヲ聞ルベシ、我命ニ入ノインデペンデンス〔自主自立〕トイフ語ヲ聞ゴトニ、吾國ト吾人民ノ事ヲ想ヒ出サズトイフコトナシ、夫自主自立ノ源、吾邦ヨリ生ズルモノアリ、又外國人ノ吾國ニ來レルモノヨリ得ルモノアリ、然ドモ、我深ク吾心ニ悟レルハ、インダストリアル。インデペンデンス〔工事ヲ勉強スルヨリシテ生ズル自主自立ノ權ハ、己ノ金ガ吾等自己ノカニ依頼スルコトナリ、〕我思フニ、邦民ノ勉強シテ工藝ヲ爲スニ由テ、今日ノ如キ昌運ニ至リ、光輝ヲ發シタルハ、未曾有ノ事ナルベシ、然トイヘドモ、コヽニ止ルベカラズ、邦人既ニ一層ノ發達ヲ遂メタラバ、コレヨリシテ、恆久堅忍ニ以テヨク成就ノ功ヲ奏スベキナリ我思フニ、邦人銳意ニ勉強センニハ、今ヨリ後、久シカラズシテ、邦人盡ク同等ノ安寧ヲ得、同等ノ厚祉ヲ享ケ、同等ノ自主自立ノ權ヲ得ベキ地位ニ至リ、

第一編　九

四　考察―『西国立志編』以外の資料の検討

以上、『西国立志編』諸本を調査対象として、活版印刷資料における傍線と振り仮名の関係について検討を行った。その結果、以下の傾向が確認できた。

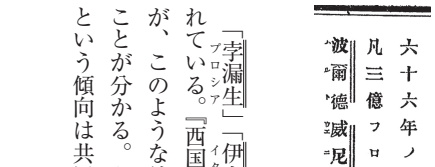
・読みを示す振り仮名が右側に付されるため、漢字表記地名・人名の左側に傍線が付される。即ち、傍線と振り仮名は異なる位置に配置される。

・行間が狭い場合、振り仮名と傍線が同時に付されることはない。

ただ、『西国立志編』のように漢字表記・仮名表記とで傍線の位置が異なる例は特殊であり[16]、漢字表記・仮名表記ともに傍線が使用されている場合、概ね符号の位置は同一である。本節では『西国立志編』以外の活版印刷資料における分析を行い、先述の傾向に当てはまるかどうか考察を行う。本節で挙げるのは、藤本（二〇二三）で調査対象とした資料である[17]。また、小林（一九八二a）において、右側に傍線を付すことが明治期一般的な表記スタイルであると言われる、地名・人名に付される傍線を中心に扱う。

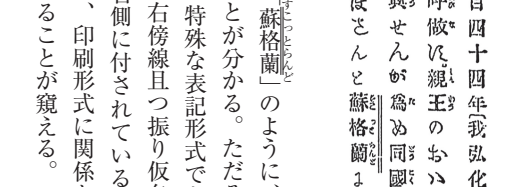
まず、傍線が右側に付される資料の分析を行う。右側に傍線が付され、且つ傍線が付された語句に振り仮名が付されている資料は五六点確認できた。そのうち左側に振り仮名を付す資料が四八点確認できた。例として、『政家必携各国年鑑』（一八七四）を挙げる。

図8　『政家必携各国年鑑』[18]　二〇丁裏


六十六年ノ夏孛漏生伊太利ノ二國ヲ敵トセシ戰ノ時
凡三億フロリンスノ債ヲ更ニ增加セリ然レモ其際崙
波爾德威尼西亞伊太利地方ノ一部ニ在ル公債ハ其責ヲ脫セリ是

一方で、右側に振り仮名が付される例、即ち傍線と振り仮名が重なる例も八点確認できた。以下『西国列女伝』（一八八一）の例を示す。

図9　『西国列女伝』[19]　二頁


昔者西曆一千八百四十四年(我弘化元年)の頃かとよ英國よ
查理期義德瓦と呼做ひ親王のおいしげるが。スチユワード
と云ふ王家を再興せんが爲め同國よ威權逞じるしきハノ
ーブル王家を滅ぼさんと蘇格蘭よ於て一揆の戰端を開か

「孛漏生」「伊太利」のように、地名を示す振り仮名が左に付されている。『西国立志編』とは傍線・振り仮名の位置が反対であるが、このような結果から、『西国立志編』の表記形式が特殊であることが分かる。ただ、傍線と振り仮名は異なる位置に配置されるという傾向は共通している。

「查理期義德瓦」、「蘇格蘭」のように、振り仮名と傍線が同じ位置に付されていることが分かる。ただその割合は低く（五六点中八点で一四・三％）、特殊な表記形式であると考えられる。整版本の例も調査すると、右傍線且つ振り仮名が使われている資料五一点中、振り仮名も右側に付されている資料は七点（一三・七％）であった。そのため、印刷形式に関係なく、振り仮名と反対側に傍線を付す傾向があることが窺える。

次に、傍線が左側に付される資料の分析を行う。左側に傍線が付される資料は九点と少なく、そのうち七点が右側に振り仮名を付していた（二点は振り仮名なし）。例として、『実用万国史直訳』（一八八五）を挙げる。

図10 『実用万国史直訳[20]』 一〇頁

〔四〕私ハ汝ハ世界ノ四分ノ一ノ人民（ピープル）ノ話ヲ聞（ヒアド）ヒタト假定（サッポース）ル、此ニ依テ彼等ハ亞米利加（アメリカ）歐羅巴（ユロップ）亞弗利加及ビ亞細亞（エシア）ヲ目指（メヂン）ス其等ノ外ニ其ノ所ニハ島（アイランド）ト名附ケラレヲ水ニ依テ圍繞（サーカムヂッド）ダル陸ノ大ヒナル多クノ部分ガアル

「人民（ピープル）」「島（アイランド）」のように、英語の片仮名表記が右側に付されている。また「圍繞（トリマカレ）」のように意味を示す振り仮名が左側に付されており、『西国立志編』と似た形式であるが、このような表記形式は少数派である。

以上の結果から、活版印刷資料の場合、振り仮名を伴う場合は右側に傍線を付す形式が優勢であることが分かる。つまり、「外国地名・人名の右側に傍線を付す」という明治期一般の表記形式が優先されているのである。『西国立志編』のように振り仮名を右側に付し、地名・人名を表す傍線を左側に付す例は、明治期において特殊な表記形式であることが窺える。

『西国立志編』においてこうした表記形式が採られた理由については、現段階では示し得ない。しかし、中村正直自身が、翻訳段階ですでにこのような表記形式による出版を意図していた可能性は考えられる。静嘉堂文庫に、『西国立志編』の訳稿本が所蔵されている[21]が、確認したところ、傍線の使い分けがなされていた。

（4）彌爾（ミル）ノ詩ニ曰ク國ノ貴ミラル、トコロノ位價ハソノ人民ノ貴ミラルベキモノ、合セ集メル位價ナリ 一頁

（5）ウイルリアム ダーガン（William Dargan）自立ノ事ヲ論ズ 一六頁

大久保（一九六六）は、稿本には静嘉堂文庫本を浄書したとみられる別本（第一編のみ。立教大学図書館大久保利謙文庫蔵）があり、刊本は別本を修訂した決定訳稿であると指摘している。表記形式の決定に至るまでの過程を示すには、各本の詳細な比較検討が必要であるが、振り仮名の位置により傍線を付し分ける表記形式を、初期段階で中村正直が意識していたことは言えるだろう。

五 おわりに

本稿ではまず、『西国立志編』洋装活版本諸本を対象として、活版印刷資料における傍線・振り仮名の関係について検討を行った。その結果、「傍線と振り仮名は異なる位置に配置される」、「行間が狭い場合、振り仮名と傍線が同時に付されることはない」という傾向を示した。

次に、『西国立志編』以外の資料を用いて、示した傾向の検証を行った。『西国立志編』の「漢字表記地名・人名の振り仮名を右側に付し、傍線を左側に付す」という表記形式は特殊であり、振り仮名を伴う場合は右側に傍線を付す形式が優勢であることを示し

た。ただ、「傍線と振り仮名は異なる位置に配置される」という傾向は一致していた。行間との関連性は示し得なかったが、傍線・振り仮名は同じ位置に付されにくいという傾向が整版本と共通していることから、印刷形式より、「外国地名・人名の右側に傍線を付す」明治期一般の表記形式に揃えるという、一種の規範意識が大きく関わっているものと考えられる。

注

（1）小林（一九八二a）は、外国地名に右複線、外国人名に右単線を付す形式が明治期一般の表記形式になると指摘している。藤本（二〇二三）の調査でも、この傾向は確認できた。

（2）外来語を仮名表記する際に、地の文と異なる仮名を使用することをいう。以下は、平仮名交じり文・外来語片仮名表記の例である。

無機體定性離剖術に於ては此三藥の用甚だ少く僅にブロミイュムとヨジイュムを辨別するに要するのみ就中ホローロホルムと硫化炭精を撰用す　『試薬用法』（一八七〇）

（3）W・J・オング氏は、『声の文化と文字の文化』において、「手書き本の文化は、〔本の〕生産者指向 producer-oriented である。なぜなら、ある作品の写本の一冊一冊には、筆写する一個人の時間の莫大な消費がこめられているのだから。中世の手書き本は、略号で満ちている。そうした略号は、読者には不都合でも、筆写する者には好都合なものである。〔それに対し〕印刷は、〔本の〕消費者指向 consumer-oriented である。なぜなら、ある作品の版本の一冊一冊には、〔手書き本に比べ〕はるかに少ない時間の投資しかこめられていないのだから」（二五二頁）と述べており、手書き本は書き手重視、版本は読み手重視で製作されていることが指摘されている。

（4）小林（一九八二b）参照。

（5）『西国立志編』整版本の詳細については、大久保（一九六六）、岡島他（二〇〇〇）により、私に纏めた。

（6）以下、仮名表記地名の左側に複線が引かれている例を示す。

亥爾満（イルマン）ハ、法國モルハウスノ人ナリ　第二編、二二丁表

（7）小林（一九八二a）の表4で示されている内容に、使用率及び合計を追加している。

（8）三・二以降の『西国立志編』洋装活版本の詳細については、田中（二〇二三）により、私に纏めた。

（9）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：154/3（2））

（10）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：31-217）

（11）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：33-203）

（12）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：特21-54）

（13）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：特21-486）

（14）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：特21-481）

（15）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：31-217ロ）

（16）『西国立志編』以外に筆者が確認できているのは、中村正直訳（一八七二）『自由之理』のみである（国立国会図書館デジタルコレクション所収（請求記号：特39-274））。

（17）調査データは、リサーチマップの資料公開のページに、藤本（二〇二三）調査資料一覧として掲載している。

藤本能史（Yoshifumi Fujimoto）－マイポータル－researchmap https://researchmap.jp/yoshi-fujimoto

資料の選定基準は、以下の通り。

資料の選定基準として、NDC分類を参考にした。各分野の所収資料数、また資料を概観したうえで窺える分野ごとの外来語の使用状況に鑑みて、各年哲学より四点、歴史より五点、社会科学より五点、自然科学より三点、外来語使用の少ない技術・産業・芸術・言語・文学は、これら五分野より三点を選定した。ただし一八六八年～一八七二年については、調査対象として扱える資料が二〇点に満たなかった。以下、一八六八年～一八七二年の調査資料数と分野毎の内訳を挙げる。

・一八六八年―五点（社会科学三点、自然科学一点、言語一点）
・一八六九年―一二点（哲学一点、歴史六点、社会科学五点）
・一八七〇年―一三点（哲学一点、歴史五点、社会科学五点自然科学二点）
・一八七一年―九点（哲学二点、歴史三点、社会科学二点、自然科学二点）
・一八七二年―一七点（哲学二点、歴史五点、社会科学四点、自然科学四点、産業一点、文学二点）　藤本（二〇二三）、三〇頁

（18）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：特39-401）

（19）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：特18-975）

（20）画像は国立国会図書館デジタルコレクションによる（請求記号：特20-74）

（21）静嘉堂文庫蔵本（函架番号：105函23架、図書番号：18751）を、国書データベースのマイクロ画像で確認した。

参考文献

大久保利謙（一九六六）「中村敬宇の初期洋学思想と『西国立志編』の訳述および刊行について―若干の新史料の紹介とその検討―」『史苑』第二六巻二・三合併号（大久保利謙（一九八六）『幕末維新の洋学　大久保利謙著作集5』に再録）

岡島昭浩・澤崎久和・永井崇弘・李忠啓（二〇〇〇）「『西国立志編』の漢語―左傍訓を有する漢字語彙とその索引―」『福井大学教育地域科学部紀要Ⅰ　人文科学　国語学・国文学・中国学編』五一

小林雅宏（一九八二a）「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」『文研論集』八、専修大学大学院学友会

小林雅宏（一九八二b）「『西国立志編』におけるふりがなの使い分け」『専修国文』三一、専修大学国語国文学会

田中菜（二〇〇二）「『西国立志編』探書録～奎章閣版の謎」『彷書月刊』一九―一、彷徨舎

田中菜（二〇二三）「『西国立志編』洋装活版本の印刷と製本」『書物学』二四、勉誠出版

深澤愛（二〇〇六）「近代における外来語片仮名文字列の特質変化―『太陽』及び『太陽』前誌群を資料として―」『国語文字史の研究』九、和泉書院

藤本能史（二〇二三）「明治・大正期における外来語に付される補助符号について―表記形式ごとの使用状況を中心に―」『語文』一二一、大阪大学国語国文学会

矢田勉（一九九八）「印刷時代における国語書記史の原理」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』、汲古書院（矢田勉（二〇一二）『国語文字・表記史の研究』に再録）

矢田勉（二〇一二）「漢字仮名交じり文要素としての振り仮名」『国語文字・表記史の研究』、汲古書院

W・J・オング著、桜井直文他訳（一九九一）『声の文化と文字の文化』、

付記

本稿は、令和六年度大阪大学国語国文学会（二〇二四年一月六日、於：大阪大学）における口頭発表に基づいたものである。執筆にあたり、多くの方々にご教示・ご意見を賜った。記して感謝申し上げます。

（ふじもと・よしふみ　熊本学園大学特任講師）